
バカと妖魔と召喚獣～狼少年と白き鹿～

OOO・JANIKELU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと妖魔と召喚獣〜狼少年と白き鹿〜

【Nコード】

N8448Z

【作者名】

OOO・JANIKELU

【あらすじ】

昔：蒼き狼と白き鹿：そして黒い妖魔がいた

舞台は学園！敵は仲間達？妖魔に取り付かれた人を救うために吉井明久とおなじみのメンバーが立ち上がる！これは馬鹿な少年が悩みを抱えた人に出会い、解決し：仲間達とAクラスを目指す恋愛バトルコメディ！ シリアス、裏描写を突き抜け限界までを目指します！（笑）

第零問：プロローグ（前書き）

「ねえ……もし……命があと1日しかなかったらあなたならどうする？」

第零問：プロローグ

「きゃっ……！」

ある時、一人の少女が足を滑らせ神社の階段から落下する……この如月神社は滑りにくいのだが……誰かがゴミを必ず捨てていくと言われている

「……………！！！」

少女は目を瞑り衝撃に備えた

ある日……少女は神社へ向かった……彼女は文月学園出身の高校一年生である

名は琴吹 由莉奈（ことぶき ゆりな）

吹奏楽に入っていて……毎日を懸命に生きるとても優しく頑張りやな少女だ

「……」

由莉奈は軽いステップで神社へと向かう林の道を通る……文月学園のブレザーが光に照らされ良い具合に綺麗で、スカートもはためいている

由莉奈は毎日、この神社へと向かう

由莉奈は幼い頃、幼なじみがいた……とても優しく勇敢な男の子だ……しかしある時、重い病にかかり、彼女は必死にこの神社に毎日祈っていた

結果、彼は再び元気な姿で毎日を生きている

『神様ありがとう……』

由莉奈はそれからというもの毎日、幼なじみを助けてくれた神社へとお参りに行くのだ

「神様…待っててね！」

由莉奈は階段をリズム良く登って行く。少し最近部活で習った歌を口ずさみながらタンタンと規則よく

ズルツ

「え…？」

あと一段という所でお菓子のゴミに引っかけり滑ってしまった…そのまま尻餅をつくわけではなく真っ逆さまである

こここの神社の階段はかなり急だ…毎日登ってる人にとっては訳ないが落ちるととても危険な階段である

（助けて………！）

由莉奈はぎゅっと目を瞑り必死に祈る…死にたくない…それだけを祈っていた

ボスンッ

彼女はそっと目を開ける…ぶつかってはおらず何かに支えられていた

「大丈夫か？」

「……あ……」

そっと降ろされ由莉奈はすかさず声の主を見た……が、彼は既に背を向けて歩き出した

「文月学園の制服……」

由莉奈はただ彼の背中を消えるまで眺めていた……

彼の名は吉井明久……由莉奈と同じ一年であり、同じ学園の生徒であった

由莉奈は知らなかった……これが彼との四年ぶりの再会だと言いつことに

設定など

皆さんどうも！ということで新しい小説のスタートです
バカ恋があるので更新は遅めになります
以下からは設定についてです

話しは戦いと恋愛です！しかし戦いの方はほとんど残酷です
明久×オリです！

明久はあることにより口調や性格が変わっています
雄二と明久は雄二の妹のおかげで対立が少ないです
バカテスのあるメンバーは特殊な力があります

以下が気に入らない方はお戻りください
バカ恋並みに甘さシリアスを目指してますので苦手な方はコーヒー
をお忘れなく（笑）

第一章：ゆりなシロジカ（前書き）

「 会いたい…ただそれだけだった」

「運命…そんなものはないと思っていた」

第一章：ゆりなシロジカ

昔、天を支配する蒼き狼がいた…気高くそして素晴らしい生き物だった

同じく地を支配する白い鹿がいた…清らかでそして美しい生き物だった

二匹は結ばれ子孫を産む…そしてこの世に蒼き狼と白き鹿と契約した者が誕生したのだった

それとは別に…海を支配していた妖魔が存在していた。妖魔は妖怪に似た化け物で人に取りつき苦しめる

蒼き狼と白き鹿はその妖魔を喰らう…それが使命であり、彼らの宿命なのだから

同様に契約した者もしかり…そして妖魔との争いは未だに終わりを告げてはいない

・再会と試験召喚戦争と蒼い狼

春：それは新たなスタートを切るにふさわしい季節だ…僕、吉井明久は今年私立文月学園で二度目の学園生活を送る

振り分け試験を終え、それこそそのんびりしすぎたせいだろう…ゲームをやりすぎて遅刻をしかけていた

「……はあ……」
ゆっくりと両脇に咲く桜達に祝福されながら坂を上る……まあ今年も満開に咲いたもんだ
しばらく歩いていると校門が見えてくる
……この一步を踏み出した時……新しい学園生活が……始まる！

「遅刻だ吉井！」
「……西村！」
ぐわああ！まさかとは思っていたけどあいつが振り分け試験結果を配ってるなんて……いきなり不幸だ！

ガッン！

「だあつ！何するんだ！」
「西村先生と呼べ！全く貴様は去年の冬からおかしくなりおって……」
「……」
言いたいけど言えない……僕が変わった理由なんて誰も信じてはくれないのだから

「まあいい。それより振り分け試験の結果だ」
「ああ……やっぱりか」
「そうだ……吉井一言いいか？」

西村の声に頷きながら封筒をピリピリと破いていく……振り分け試験というのはまあクラスを決める為のものだ
良い奴にはAクラスで豪華な生活、最下位の奴には最低な設備での生活。全くババアの考えることはわからない

「去年からお前を見てきて吉井は少し変わったがやっぱり馬鹿

じゃないのかとずっと思っていた」

「は？何を言ってるんだ。そんな訳ないだろ？今にあんた『節穴』
って呼ばれるぜ？」

「ああ…そう言われてもおかしくないな」

「はは…わかればいいんだ」

ゆっくりと封筒から紙を取り出しパリリと開いた

吉井明久 Fクラス

「吉井、お前は馬鹿だ」

こうして最悪最低の学園生活がスタートしたのだった…正直何かの
間違いだと信じたいが…この後の出会いは間違いではなかったのか
もしれない

ちなみに紹介しておく、こいつの名前は西村…まあみんなからは
鉄人と呼ばれていたりする

その理由はごく簡単にトライアスロンが趣味だからだ…そしてこの
鋼鉄の体…鉄人と呼ばれるのはそう言った理由からである

「でもな吉井…お前のやったことは胸を張っていいと先生は思っ
ている」

「西村……」

「西村先生だ…ほら、早く『すみません！』遅刻だぞ！」

西村の怒鳴り声が響き何だろうと進んでいた足を止めた

「琴吹か。今日はどうしたんだ」

「あつ…恥ずかしい話なんです…寝坊しちゃって」

「はっはっは！そりや恥ずかしいな」

「わ、笑わないでくださいよ〜！」

…あの西村が笑った……何だ？今日は何かやばいことでも起きるのか！？まさか…僕は死んじゃうの！？

「じゃあ…失礼します！」

「おう。頑張れよ」

話が終わったのか琴吹と言う奴はどんどこちへ向かって来る…橙色の綺麗な長い髪が揺れて思わず視線がそっちにいつてしまう…

「ん？……吉井君？」

「……………え…？」

突然話しかけられたと思ったたら琴吹がじつと覗き込んでいたしかも…その声は懐かしい

「あ！やっぱり吉井君だ…。久しぶりだね！ということはあの時助けてくれたのも吉井君？」

「まさか…そのおつとりとした態度……由莉奈か？」

二度目の春…僕は運命的と言える幼なじみとの再会をしたのだった

001 (前書き)

「明久ハーレム…そんなの有り得ないだろ！」

琴吹由莉奈：昔の幼なじみで一番幼い頃一緒に遊んでいた
その時はまだ僕は馬鹿だったからまあ色々やってしまった訳で……
ということはどうでもいい！

「四年ぶりかあ……久しぶりだね吉井く……明久君」

「ああ……琴吹も元気で何よりだよ」

琴吹は四年前、よその場所へ引越した……だから中学生生活……僕には
あまり良い思い出はなかったと言えよう

「それにしても……琴吹だいが大人びたな」

特に胸や……体型とか……まあそれ以外にもまず美しくなったと言える
……しかし顔は相変わらず可愛い分類に入る。一瞬彼女の赤い……ルビ
ー色の瞳と視線がぶつかりすぐに逸らす

「そりゃ……四年も経てばそうなるよ……明久君はあまり変わってない
ね 特に顔とか」「ちよつと待つんだ琴吹。それはダイレクトで僕
を傷つけてしまう言葉の武器だよ！」

「くす……良かった。やっぱりいつもの雰囲気はあるんだね」

「まあ変わったのは一部だけだからな」

二人で並んで歩いているとAクラスが見えてきた……よし無視だ無視
しよう

「うわあ……凄いなあ……明久君？見ないの？」

「琴吹……一つ教えておくよ。あまりにも豪華すぎる者を見たら……そ
の後の落胆さに耐えられなくなるぞ」

Aクラスの設備にあまりにも感動していたら……Fクラスを見た時、

絶対帰りたくなる。そんなことにならない為にも早く去らないと

「え…？明久君はAクラスじゃないの？」

「琴吹…僕の性格からすればAクラスは無理だろ？」

「あつ…そうだねって…そんなことないよ！明久君馬鹿じゃないもん！」

琴吹…嬉しいんだけど最初の頷きは何だ？あれか！？実はSですつて言いたいのか！？

「残念だけどこれが事実なんだ」

ピラリとさっきの紙を見せ窓を見ながら黄昏る…勉強なんてほとんどしてなかったから…

「やったあ！明久君と同じクラスだよ！」

琴吹は思わず飛び上がり抱きついてくる…琴吹から結果を渡してもらい肩にたわわが押しつけられたままゆっくり紙を開いた

琴吹由莉奈 Fクラス

「…まじか」

正直彼女にはAクラスでのびのびと平和に勉強して欲しかったんだけど…ん？

「なあ琴吹…お前って去年もここ？」

「うん！実はね 去年ようやく帰ってることができたから」

「…！」

「明久君？なんで落ち込んだの？」

そりゃ帰ってきたのに連絡もなしで、一年間会えなかったら誰だつて寂しいでしょ？

なんか僕だけのけものかよ！って感じでさ

「まあいいや…それより琴吹。早くFクラスに行かないと」

「あっ…！そうだったね」

久しぶりに見ることができた彼女の笑みに安心を感じ、僕らは自身の教室へと向かった

「明久君…」

「わかってる」

「「帰るぞ！（よ）」」

「逃げるな明久」

ガシリと捕まれ動きを失う…くっ！雄二貴様！
何故こうなったのかは簡単だ

教室のあまりの酷さに落ち込む僕ら

僕が先頭をきつて扉を開ける…

悪友の登場… 罵倒を言われ由莉奈がピコハンで叩く

その隙に逃げようとした捕まった

「以上だ」

「堂々と言い切るな馬鹿」

「む！明久君は馬鹿じゃないよ！」

パソコン！と由莉奈が坂本雄二にピコハンで再び叩く

「痛っ！さっきからなにすんだお前！」

「明久君を馬鹿馬鹿言っちゃ駄目！」

「だっ！わかった！わかったから叩くな！」

由莉奈はピコハンを下ろしすかさず僕の後ろに隠れた。まあ今のは雄二が悪いな

「たくっ…明久。そいつは誰だ」

「琴吹由莉奈さ…僕の幼なじみだよ」

『『幼なじみだとおおおお！？』』

周りからは殺気を漏らした叫び声が響く… 由莉奈は怖かったのかきゅっと僕のブレザーを掴んだ

「はは…こりやまた危ないクラスに入ったもんだよ」

「そこには俺も納得だ」

雄二と苦笑しあつてるとガラリと扉が開いた…冴えない顔にヨレヨレのシャツを着た教師が入ってくる

「すみません…ちょっと通してください」

「「海馬!?!」」

「違います」

一瞬あの…遊戯王で有名な海馬社長と思つてしまつくらい声が似ていた…というか社長だろ絶対

「皆さん席に着いてください。HRを始めますので」

「あの…席は」

「ご自由に」

「席すら決まつてないの!? 明久君」

「わかつてるって…とりあえずあそこがいいな」

琴吹を連れて奥の方へ座る…琴吹は風が少ない前で僕は後ろだ…何? 何故わざわざ後ろかだつて?

決まつてるじゃないか…琴吹が可愛いからさ

「明久!」

「ん…?…とっ!」

横から声がし、振り返る前に抱きつかれた…ふむ…この匂いは…由美か

「ゆ、ゆ由美ちゃん何やつてるの//」

「あつ由莉奈久しぶり!」

(何故だろう? なんかやばいことになりそうだ)

これは後に完成する明久は―れむの序章に過ぎなかった

002（前書き）

「気づいて欲しい…この気持ち」

弓野由美：ゲーム仲間として去年から意気投合。優しく何気ない仕事草が可愛い親友だ
まさかつ…琴吹と知り合いだったとはな…

「あつ…離れてよ、由美ちゃん！」
「も、もうちよつとだけ」

琴吹は僕に抱きついていて由美を引き離そうと引つ張る。
弓野は優しいんだけどちよつと激しい面があるんだよな…

「はは…まあいいじゃないか」
「明久君はそれでいいの？」

「どういうことだ？」
「え…？だつて…」

「親友なら抱きつくことくらいおかしくないでしょ？」
「「え…？」」

あ、あれ？なんで二人は固まったんだ！？何か悪いこと言ったかなあ…あ！そうか

「そんなに言うなら琴吹も抱きついたら？」
「ええ！？わわわ私も？」
「どうした？なんなら僕が抱きつこうか？」

「あ、あきひ、あき、あああ明久君とはぐ！？」
琴吹は真っ赤になりながら慌てふためく…何を驚いてるんだ

「明久君…」
「相変わらずじゃのお主は」
「……………鈍感」

何？親友のムツツリーニや秀吉達まで何呆れてるんだよ　ちよつと

待つんだ。鈍感ってなんだ鈍感って…

「琴吹も弓野もどうしたんだよ？僕は別にいやらしい気持ちなんて思っていないよ？琴吹に関しては久しぶりじゃないか…」趣味は吉井明久を殴ることです！」誰だ！そんな危険で限定的な趣味を持った馬鹿はああ！」

教卓に視線を向けるとポニーテールに緑の瞳が特徴的でツンデレではなくガンデレな女子…島田美波がいた

「ハロハロ」

「ぐ…島田！」

ガンデレと言うのは照れ隠しで殴ると言う意味だ…去年からよく関節を外されていたことが懐かしい

「……………島田さんか…」

「どうしたの琴吹」

「なんでもないよっ」

嘘だ…さっきまでピコハンを取り出していただろ。まあ僕の為と言うのは嬉しい限りだが…
というかてへへと笑う琴吹はめちゃくちゃ可愛い！！

「……………！（明久からの依頼か）」

琴吹と弓野の写真を2ダース頼んだ

『（了解）』

さて目的達成だ…後は気長に待つか『趣味は吉井明久君にキスしてもらったことです』誰だ！？危なくて可愛い趣味を持った奴は！

「！」

島田と同じようにバツと教卓に目線を持っていくとクリーム色に近く綺麗な癖の無い背中まで伸びた髪に赤い瞳が特徴的な女子がいた

さかもとはるな

坂本春菜：雄二の妹にして雄二とは真逆でとても優しい人だ：

春菜はにこにこ手を振っている

『吉井い…』

うつ…息苦しい…向こうから凄いプレッシャーが…

「ちなみに明君に手を出した人は…わかってますね？」

『YES！MY load！』

「はは…全く春菜のいたずらにも困ったもんだよ。なあ雄二」

「…そうか？俺としてはあいつは本当にお前を好いていると思うが…」

「ないない…ん？二人共どうしたんだ？」

「う、うん。ちょっとね」

「春菜ってあんなに大胆だったかなあ…」

「？『明君』のわああ！？」

思わず後ずさるが後ろは壁だった…春菜はチャンスとばかりに自身の唇を押しつけようとする…

「！」

「そのくらいにしておけ春菜『きゃっ！雄二お兄ちゃん離してよお！』」

雄二に引き離されじたばた暴れる妹に雄二は『はあ…』とため息を

深くついた…僕は僕でドキドキする心臓を押さえている

ムツツリー二はムツツリー二で写真を収め…秀吉は既に教卓の方を向いていた

流石秀吉と言うべきか…全『趣味はお菓子作りにフルートを吹くことと…あと、明久君に『か、かかか可愛いな』って言ってもらったことです！』…誰だ！？そんな野望を持った奴は！

「こ、琴吹…か」

あんなに必死で言われると…正直照れるし…胸が熱くなる

『吉井だと…？』

そして一気に寿命が縮みそうだ…というかあつちの集団って…恋人ができないからと言う理不尽な考えから作られたFFF団か！？

「よろしくお願いします！」

「ぐふあー！」

その場にいた全員が鼻血を吹き出し倒れる…僕は鼻をつまんでとりあえずトントンと首を叩く。琴吹の笑みは危険だな

「弓野由美です！好きなことはゲームで…明久君と一緒に遊んでます」

「また吉井だとおおお！？」

「おい…弓野…あまり爆弾発『諸君！今こそ男の敵を狩るのだああ！』ひ…ぎゃああああ！」

「む！明久君を苛めたら駄目！」

「ちよつとみんな落ち着いて！」

弓野と琴吹によって止められました

「うっ…痛てて」

「大丈夫明久君？」

うるうるした目で手当てをしてくれる琴吹…ああ癒やされるぜ

「ごめんね」

「弓野が謝ることじゃない…悪いのは理不尽なあいつらだよ」

「全く馬鹿だなお前」「雄二お兄ちゃん…」全く馬鹿だなあいつらも…」

ガラリッ

自己紹介が続く中、突然扉が開かれ一人の女子が入ってきた

「あの…遅れてすみません…」

『え…？』

その場にいた男子達は口をあぐりと開けたまま目を見開いた

姫路瑞希…成績優秀、美人、礼儀正しい…まあ男子達の憧れが詰まった性格の持ち主だ。だが振り分け試験…姫路はいきなりの体調不良の為退席するしかなかったのだ。退席すれば今までの点は全て無くなる。教師に訴えても聞いてもらえず結果、姫路はこのFクラスへと強制的に決まったのだった

「姫路さんですね？保健室に行つてたことは聞いています。今、自己紹介を行っているので姫路さんもお願ひします」

「あ、はい！姫路瑞希です！よろしくお願ひします！」

姫路は礼儀正しくお辞儀をする…緊張しすぎて顔が赤くなつてゐるぞ…

「はい！質問良いですか？」

「あ、はい！何でしょうか？」

「なんで『僕が説明した』」

『そういえば俺も熱（の問題）でFクラスに』

『ああ。あれは難しかったよな』

『俺は弟が自動車に跳ねられたから』

『嘘つくな。お前の弟元気だったぞ？』

『琴吹さんが寝かせてくれなくて』へえ…人の幼なじみに手を出すとは…馬鹿な奴だ」ぎゃあああ』

『明久君！嘘だから！大丈夫だから！はわわ！それ以上やったら頭から大脳が飛び出しちゃうよ！』

全く馬鹿だらけなクラスだ…なるほどこれがFクラスか

「と、とりあえずよろしくお願いします！」

姫路は再びお辞儀をした後、トタトタ琴吹と雄二の間の席に座った…そしてふうとなでおろしている

「姫「姫路」」

屑雄二いい！！台詞をかぶせて来やがって！なんだ！？前々から思ってたがお前はなんか恨みでもあるのか！？

「あ、はいなんでしょうか…えっと」

「代表の坂本雄二だ…代表なり名前なり好きに呼んでくれ。それより体調は大丈夫なのか？」

「僕も気になる」

「あつ！私も！」

姫路は僕らを見て驚いた表情をする…おいおいまさか不細工とかじゃないよな？

「明久君！それに由美ちゃんや由莉奈ちゃんも！」

「ん？明久…お前姫路と知りあいか？」

「ああ…僕と由莉奈は小学校の時から仲だ。それより姫路大丈夫か？」

「はいっ！お陰様で…あの時はありがとうございます明久君」

「ああ…いいよ。元気になってなによりだ」

姫路の頭を軽く撫でると恥ずかしそうに姫路は俯いた…ん？何かしたか？

「自覚ないの明久君？」

「琴吹？…待て！なんだその目は」

琴吹はなんでもないと軽く笑ってから辺りを見回した
弓野は秀吉達と話している

「明久君！」

「うわっ…どうした春菜」

春菜はにへへと笑いながらただ抱きつくだけ…だが、周囲は殺気だらけだ

『畜生！なんであんなバカに』

『春菜さん…俺に抱きついてくれ！』 『琴吹たん！』

気持ち悪い…ただその言葉しか出てこない…

前にいた福原先生が教卓を叩き見事に教卓は屑になってしまった

「替えを持ってきました…皆さんは静かに自習をしてください」

先生はすぐに教室から出て行き…僕は座布団から立ち上がり雄二の元へ

「雄二ちょっといいか？」

「ん？ああ別に良いぞ」

明久 s i d e e n d

琴吹は静かに卓袱台の埃をはらっていた

しかしその顔に元気は無く明久の方を見る

「はは…ちよつと落ち着けて」

明久は笑いながら抱きついている春菜を撫でる…その光景を見て由莉奈は寂しい気持ちに覆われていた

(…やっぱり春菜ちゃんや由美ちゃんは明久君が…)

切ない気持ちを抑え由莉奈は卓袱台にノートを広げたのだった

003 (前書き)

「強くはない。…だけどやらなきゃいけない それが運命だから」

「 今日命が尽きるならあなたは…何をする? 」

「どうした話して？」

「うん…実はね」

雄二と明久が帰ってきた後由莉奈はしばらく俯いていたがすぐに明久へ声をかける

先生がまだ来ていないと言うことで明久は相談に乗ることにし廊下へと出た

由莉奈はさっきのように軽く笑いながら明久をみる

「あのね……明久君に相談しても無理かもしれないけど……」
由莉奈はその後しばらく黙り込みゆっくり明久をみる。明久は待っているかのように静かな雰囲気だった

あのね…私…今日で死んじゃうんだ

少女の言葉は静かで…冷えていた

明久 side

「……死ぬ？」

「うん…」

最初聞いた時は嘘だと思っていた…いや思ったかった
でも琴吹の顔が嘘でないと物語っている

「何があつたんだ？」

「………中学生の頃…『ある悪魔にそう言われたの』」

……… 琴吹は続け喋る…その単語は僕の胸を貫くようだった

「その悪魔は妖魔って言った」

「！！」

胸がズキズキする…あつて欲しくなかったことが起きたのだ

「…その妖魔は何て言ったの？」

「お前はもう生きられない…俺が取り憑いたからにはあと二年までの命だつて」

「それが今日…」

「ねえ明久君！私やつぱり死んじゃうの？」

由莉奈の顔はとても苦しそうだった…相談もできず、ずっと恐怖に耐えてきたようなそんな顔をしていた。それを見るたび胸がズキズキする

「落ちついて聞いてね由莉奈…それが普通の幽霊なら解決策はいくらでもあった…でも…由莉奈が言った妖魔なら解決策は無いかもしれない…」

思わず素の口調が出ているけど気にしない…！だって親友の命の危機だから！

「…死にたくない…死にたくない…いよ…っ…嫌！嫌！しにたくない…！助けて…明久君！明久君！明久君！」

ガタガタと震え混乱してしまっている馴染みを抱きしめ優しく撫でる
「大丈夫！大丈夫だから！」

「………う…うわああん！…いやだ…よお！じにたくないよ！」いつもおっとりしている彼女は…そんな面影もなくひたすら泣いている…僕は必死に抱きしめ大丈夫と言い聞かせた

琴吹は中学生の頃…胸が大きいことで苛められていたらしい…
さらに中学生の頃は思春期だ

欲情した男子と教師により琴吹は犯されかけた…

琴吹は助けを求めたが相手が間違っていた

妖魔だ…彼女は妖魔の姿をした妖魔と出会ったんだ…妖魔は助ける
かわりにお前の寿命を貰うと琴吹に告げた

琴吹は考える猶予もなく頷きそして…彼女の命は今日までとなつてしま
ったんだ

「何で…私…何の為に生まれてきたの…ねえ明久君…」

「琴吹…」

静かに琴吹を抱きしめながらぐつと拳を握る……

（どうして僕は離してしまっただ…彼女は転校しても何もなかったのに）

しばらくこうしているとガラリと扉が開きクラスメイト達がいた…

クラスメイト達は驚いていたり嫉妬をしていたりしていた

「雄二！？どうしたの…どうしたんだ？」

「ああ…試験召喚戦争でお前について紹介しておこうと思ったがい
なかったからな」

…いつの間にそんな話を…いや…聞こえなかったただけかもしれない

「吉井！何琴吹を泣かしてるのよ！」

「島田さ…島田！？違う！これは」

島田の言葉でスイッチが入ったかのように次々とクラスメイト達が
業を煮やす

『吉井！我らが女神を泣かすとは許さん！』

『スクラップにしてやる！』

『いーや！紐無しバンジーだ！』

『違う！釘刺しだ！』

「死刑内容怖すぎるぞ!？」

く…そ。かくなる上は…!

「逃げるぞ琴吹！」

「ひぐ…え!？あぎひざぐん!？」

琴吹の腕を掴みすぐに逃げ出す…後ろでは雄二の悲鳴やら美波の怒鳴りやら…クラスメイトの死の歌やらが響く

「よし!こっちだ！」

「ひゃう！」

琴吹を引きずるような形で走る…仕方ないじゃねえか!急いでるんだからよ!

「ほっ！」

「きゃうう！」

窓から飛び降り…すぐに雨戸の筒を掴み滑り降りる。そして素早く新校舎側へと走り空き教室に飛び込んだ

「…だっ！」

「にゃわ！」

飛び込んだ拍子に思い切り転び琴吹を押し倒す形で盛大に倒れた

「痛てて…大丈夫か琴吹？」

真下にいる琴吹に声をかけると鎖骨あたりまで真っ赤になりながら強く頷いた

『くそ!吉井めどこに消えた!』

『アキ!すぐに楽にするから出て来て?』

『……裏切り者には死だけだ明久』

くっ…向こうにいるはずなのに頭に凄く響く…

「明久君大丈夫？」

「大丈夫…」

琴吹はまだ赤い顔のまま起き上がり辺りを見回した…

「ここって」

「そうさ…保健室だ」

「！！？」

「今日は先生いないな…まあいいか」

「明久君！？何をするきれしゅか！？」

琴吹さん…琴吹は真っ赤な顔になりながらしどろもどろあたふたしていた…どうしたんだろ？

「まっいいや。時間がないし…始めるか」

「…ふえ！？」

のっそりと立ち上がって道具がしまつてある引き出しを開ける

「あ…明久君？よ、良くないよそんなこと…？」

「そうも言つてられないんだ琴吹さん…今日は先生休みらしいからさ。チャンスでもあるけど」

えっといつもどこにしまつてたかなあ？…あ…違うな

「せ、先生がいない！？あ、明久君！私その…いい体してないよ！」

琴吹さんは真っ赤になりながらきっぱり告げた…その言葉に流石にツッコミを入れるしかない！

「琴吹さ…琴吹！それじゃあまるで僕は少女の裸が好きな奴になつてしまっただけど…！」

「え…？だつて明久君…わ、わ私のかかか体が目当てじゃ…」

「はああ！？ばば馬鹿言っくな！」

うつ…首まで熱い…く！消える邪念！琴吹さんの裸を妄想するなあ！

でも琴吹さん…久しぶりにあったと思ったら凄いスタイルが良くてグラマスに…

「明久君？」

「あああ！なんでもない…！それより始めようか」

「…一応聞くけど何を…」

「ん？ああ…琴吹さ…自分は何の為に生まれてきたって言ってたよな？」

「う…ん」

俯く琴吹の頭にポンと手を乗せてにつこり笑う…

「少なくとも…僕は琴吹が生まれてきたおかげでいろいろと助かったし…これからを大事に生きればいいんだよ」

「でも…私の命は今日で」

「馬鹿言っな。そんなことさせないさ絶対に…いや…僕と再会できたことでその運命は今日で終わりさ」

「え…？」

驚く琴吹を優しく撫でてまた微笑む…

後に僕は琴吹と再会できたのは何かの運命だったのかもしれないとたびたび感じるのだった

引き出しをしばらくあさつてるとようやく探してた物を発見した
ふう…あいつこんな所にしまったのかよ…

「よし…これでようやく実行できる」

上下に振ってたら琴吹がまじまじとそれを見つめていた

「明久君…それ何？」

「これは…妖魔専用のアイテムさ」

まるで獣の爪をイメージしたかのような青い物を振りながら琴吹に近づいていく

「明久君妖魔知ってるの？」

「まあな…何度か相手したし」

軽く笑いながら琴吹の隣に座る…ここで何故僕がこんなに詳しいか簡単に説明しよう

僕はある時一匹蒼い狼と契約をした…理由は説明できないが僕はそいつに選ばれたらしい

契約した者に待ち受けるは妖魔との戦い

そして…保健室の先生である佐野と出会い僕は力を佐野に預けている
それがこの蒼き狼の爪…ウルフブラッドだ。こいつは人に取り憑いた妖魔を引き離すことができる。けど僕の力の一部である為普段は佐野に預けていた

実にわかりずらい話で申し訳ない

「ほえ…凄いなだね明久君は」

「いや…嬉しい力でもない。どちらかと言えばいらぬ」

琴吹は首を傾げるが僕はまた軽く笑う

あまり好きではないんだ。あの出会いから僕は変わってしまったのだから

「よし時間がないから早く始めるぞ…」

首や足を軽くストレッチした後、琴吹のスカートを掴む

「え！？あ、あの明久君？」

「時間がないって言ってるだろ」

「琴吹はわたわたしながらスカートを掴んでいた僕の腕を握る…作業ができないんだが」

「あああ明久君！駄目だよ！セクハラだよ！」

「…ちよつとまで！酷い誤解を受けてるんだけど！？」

「じゃあなんでスカート掴むの！？」

あつ…なるほど…確かにつかまれて反応しない女子はいないな

「…理由はちゃんとある…一つは妖魔の刻印が足の横にあるからだ…いくら力を預けてるって言っても少しは残ってるからな…そう言っただことはわかるんだ」

「じゃあ…二つ目は？」

「ただ純粹に欲望のままに琴吹…お前のパンツが見たい」

パカアアン！

「何を言ってるの明久君のエッチ！」

「すまない半分冗談だ」

「二発目が来たのは言うまでもなかった…」

「…とにかくやつぱり捲らなきゃ駄目？」

「ああ…ついでにパ…すみません冗談ですから！ピコハン構えないで！」

「うつ…！」

p r r r

「電話か…雄二だな。もしもし」

『 明久！何処をほつつき歩いてんだ！』

「今大事な用事をしてるんだよ…」

『 琴吹とか？試験召喚戦争始まっちゃうぞ？お前一人何女子と遊ん
「試験召喚戦争より命の方が大事だろ！そんなことしてる場合かよ
！」 おい明久…』

無理やり通話を切り携帯をベッドに投げ捨てる…

命を何だと思ってるんだ

「明久君…」

「悪い…始めようか」

「う、うん」

琴吹は赤くなりながらスカートを捲ろうと手をかけるが震えている
それを見たやいな、僕は琴吹のスカートを掴み側だけを下着が見え
ないように捲くる

そこには刻印があり…琴吹が何か言う前に素早く狼の爪を軽く押し
付けた

「よし…完了」

ゆっくり離しスカートも元に戻し爪を見る

「え？もう終わったの？」

「何？本当に見て欲しかったのか？」

からかうように聞いてみたが琴吹はポカーンとしている

「狼の爪はさ強力で…どんな妖魔でも引き離せるんだ」

「へえ…凄いんだね」

「でも最後は己の手で始末しなきゃならないけどな」

そう言うってから爪を取り出し空中にひつかくと途端に周りが白くな
り物は黄色やピンク色になった

「ここは異空間だ…さっきの場所と違って妖魔専用の教室かな」僕は辺りを見回す琴吹に前にいる奴に指差し教える

「何あれ？」

「あいつが琴吹に取り憑いた妖魔…『黒鹿』さ…ほら人のように見えて角とかあるでしょ」

「あ…本当だ」

「黒鹿は取り憑いた者の寿命を奪い…それを養分とする。勿論邪魔者は許さないプライド高い上レベルの奴さ」

「そんな…」

「まあ今から始末するし…お前には被害ないから大丈夫。」

前に進もうとしたら琴吹に引つ張られた…その顔は凄く悲しい顔だ「襲ってくるんでしょ？危ないよ…明久君が死ぬくらいなら私が」

「はあ」

少しため息をついてから軽く琴吹のスカートを捲った

「ひゃあああ！」

「馬鹿。琴吹のパンツをみらずして死ねるかっての」

「ふええ？」

混乱している琴吹に軽く笑いゆつくりと前に進む
それに僕は必ず死ねない力があるから

「てっ…」

歩きながら爪を腕に突き刺し体内に預けていた力を送る…ぐう頭が痛いのは毎度のことだ

「…ふう」

爪を取り琴吹に投げておく…うお！やつぱりこの力凄いな

今の僕は瞳が赤くなっている…これが本来の力を使う時の状態だ…あの蒼い狼の瞳を受け継いでいる

「よしっ…やるか」

『……………！オオカミ？』

ずんずんと黒鹿の近くまで歩いていき気づいた瞬時に見えない速さで蹴りを腹にいれる

「おらああ！」

『ガッ！ガハ！』

バキヤツと碎ける音が響いき黒鹿はいきなりの不意打ちに見事盛大に転げ回った。すぐに黒鹿へ向けて走り出す

そして大きく跳躍し追撃を鳩尾に打ちつけた

『ガファア！』

「…っしゃあ！」続けて放った拳を黒鹿は素早く避け机が碎ける。

素早く後ろを振り返り黒鹿のアップアを避けるが右拳を突き落とされた

「ぐ！」

突出に左腕で防御に入っただがきしむように重く腕に嫌な音が響いた

ベキバキュ

「がああ！」

くっ…左腕の骨を砕かれた…！

蒼狼の力は肉体強化と死なない体だ…普通の人間が妖魔と互角に渡り合えるほど肉体強化されるが妖魔を倒せるかは契約者の腕次第だ。狼にはこれよりもはるかに強い本来の力があり…その力は佐野先生自身が持ち歩いている

『シネ！』

「ぐ…！」

考える暇なく黒鹿の拳が振り下ろされ素早く避ける。注意すべきはあのパワーだ

なんせあれだけで左腕がやられたくらいだ

『フン！』

「くそ！あつ！ぐっつ」

次に放たれた右ジャブを避けれず回復した左腕でガードする…が再び嫌な音が響き歯をくいしばる

「このやろ！」

『ガア！』

だらんと左腕は下がってしまうが素早く相手の膝、腹、首にザクツと蹴りを放った。黒鹿は叫びながらやられた箇所から黒い血を流す。僕は荒い息をしながら奴を見る

（効いてる！この力は上レベルにでも通用す…）
「足！？だと……ぐが！」

黒鹿は蹴りを顔に叩きつけそのまま横へと僕を投げ飛ばした。その一撃で首をやられたが…すぐに回復する。だが、黒鹿がすぐに頭を叩きつける

「がはっ！」頭が切れて血が流れ目を伝う…口からは耐えきれず赤い液体が飛び散る…デタラメすぎるぞ…あれ

『オオカミイイ！』
「がはっ！」

黒鹿は襟を掴み殴りかかる…僕も負けじと勢いよく黒鹿の顔を殴った

ゴキユ！メキメキ

「…あああっ！うっ」
『又ガアアッ！』

鈍い音が聞こえお互いに吹き飛び机に激突する…どうやら顔の骨を砕かれたらしい…

「……………」
『キサマア！』

ブレザーが血の色で反転している…ネクタイはいかにも真っ赤だ
「っ！」

『ユルサン！ユルサン！ユルサン！』
「……………ああ」

追撃され休む暇なく腹に肩に激しい痛みばかりが伝わってくる…た
まに吐血をし再び殴られ殴り返す
戦いが下手な僕にとっては続けて戦うのは無理だ…

「く……！」

『ガアアア！』

ガシリと殴った腕を掴まれ桁外れな力で握りつぶされる…叫ぶ暇も
なく首を掴まれグシャリとリングを素手で握りつぶすように僕の喉
はいかれてしまった

「っ！あ…が」

回復はするとしても苦しい…まるで拷問のようだ

『ギアアア！』

「っ！」

後ろから蹴りを放たれ赤い血が飛び散りながら壁に衝突する

状況は非常に不利であった

004（前書き）

連続更新

「私ね……大切な人がいるの……凄く優しく凄く馬鹿で……凄く格好良くて大切な幼なじみ」

「ぐぬああ！」

『ゲブグボ！』

明久の一撃が黒鹿の腹に激突し黒鹿は吐血するがすぐに血だらけの明久の顔を掴み思い切り椅子に叩きつける

「…がふっ！」

『又アアア！』

「ぐぼっ！」

立ち上がるうとした明久に黒鹿が容赦なく肘を鳩尾に叩きつけ明久は盛大に吐いた

「…はー…はー」

必死に息をしながら明久は黒鹿を見る…黒鹿は折れた両角を抑えながら苦しんでいる

（やっぱり…勝てないか。それに思ってた以上だ…あの黒鹿は防ぎきれないほどパワーが桁外れな上に早い）

『ギイイ！』

「がっはっ！」

腹を思い切り殴られ吐血をしながら震える手で黒鹿を掴む

黒鹿はそれを払い容赦なく明久を叩きつける

「ぐ…ああ！」

黒鹿は容赦なく明久の首を掴み再び喉をつぶした……明久は悲鳴を上げたが全く声が出ない

回復能力は怪我を負えばすぐに元通りに戻す力があるが、強力な力故にだんだんと回復が遅くなっていく

さらに疲労とダメージが蓄積すれば回復能力が追いつかなくなってしまう場合があるのだ

「コロス！コロス！コロス！コロスコロスコロスコ
スコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコ
スコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコ
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
あああああああああああ！ぐがああああああああ
あああ！」

ズビシュ！

「ぐ……あ……あ」

黒鹿は怒りまかせのデタラメな手刀で明久の腹を切り裂き腹に穴を空けた

明久は胃液と混じり血大量に吐きだしそのまま黒鹿に投げ飛ばされた

「明久君！！明久君　　！！」

由莉奈は長い橙色の髪を揺らしながら明久の元へ走っていく
そして明久を抱き起こし必死に呼びかける

「……………か…」

「喋らないでいいよ明久君！もういいよ！」明久は琴吹をどけて腹
に穴が空いてるというのにゆっくりと起き上がり黒鹿を見る

『ジャマヲスルナオオカミイイ！』

「そも…………いかな…いさ…………だつ…て…あいつ…に…まだ…ンツ見
せ…てもらっていな…い…しさ」

「明久君…………」

明久はへらへら笑いながらかすれた声で必死に喋る。そして赤い瞳
で黒鹿を睨みつける…その瞳はボロボロでも腹に穴が空いても闘士
を失っていない

『ナラキエロ！オマエハジャマダアア！』

「は…は…」

明久は肩で必死に息しながら涙を流しながら明久を見つめる由莉奈
に笑いかけた

「…………終わっ…………たらキ…ね」

「こ、こんな時に冗談はやめてよ！」

明久は二カりと笑いながら口から流れる血を静かに拭く…黒鹿は奇
声を上げながら突撃をしてくる

「……………うおお！」

明久は腹の底から声を出し拳をゆっくり握りしめる…瞳は鋭くなり
獣のようだ

「ガルアアア！」

『ガッ！』

力を振り絞り地面に足を食い込ませ力の限り拳を黒鹿に叩きつけ腹
を貫通させた
その姿はまるで獲物を噛み砕く狼だった

「ガルア！」

さらに赤い瞳が獲物を捕らえられるように右拳を黒鹿の顔に叩きつけ
顔を貫通させた

『ガア！アア！』

「はあ…はあ…」

黒鹿は顔と体から黒い液体をぶちまけながら奇声と悲鳴を上げなが
ら盛大に倒れた…

明久は辛くも勝利し徐々に回復している腹から力を抜いた

明久side

倒された黒鹿から何かが抜けるよう出て行った…

「あれは…」

「ぜえ…妖魔だよ…死んだから離れて行ったんだ。でも驚いたな…
まさか妖魔が取り憑いてたのは白鹿だったなんてさ」

僕はげほげほと血を吐き出しながら倒れている美しい白い鹿を眺める…ようやく声が戻った

琴吹は白鹿を見て驚くように口を押さえた…そして徐々に瞳から涙がこぼれる

「いけよ…お前の神様だろ？」

琴吹は…ゆっくり近づき抱きしめた

琴吹は気づいたのだ…かつて自分を守ってくれた存在に…白い鹿に

だが…琴吹はあの事件のせいで白鹿を見放したのだ…守ってくれない…寂しい…そんな気持ちが白鹿を弱らせ結果的に妖魔に取り憑かれ黒鹿になってしまった

「ごめんなさい…私…あなたを…ごめんなさい！ごめんなさい『白雪』…！」

地上の神様…白鹿『白雪』は優しく琴吹を舐めた…白鹿は雌だ…とても優しい神様であり、彼女をずっと琴吹を守っていくと誓った。それは今も変わらない

だが琴吹は謝りたかった…いつも自分を守ってくれる存在を否定し酷いことをしたのだから

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

『キニシナイデ…アナタノセイジヤナイ。ワタシハアナタヲコレカラゼツタイマモル…マモツテミセルカラ』

「ううん…私が弱いのが駄目だったの…私が白雪に頼ってばかりだったから」

静かに二人を見守りながら塞がっていくもまだ流れる血を拭う

と、傍らに蒼い狼…天空の神『空牙』がいた…

『ヨカッタナアキヒサー。オレモヨウマヲクエタ…オマエモアイツヲタスケタ』

「ああ…これでひとまずは安心できるけど、神様相手に戦うのなんてやっぱりムチャクチャだったよなあ…僕はまだまだ弱いってことか」

『イヤ、オマエハマダマダチカラノアリカタヲワカツテイナイダケダ。オマエハコレカラツヨクナレル』

空牙は赤い瞳で僕を見つめてくる…こいつは僕が何があっても常に味方でいてくれる…優しくて馬鹿な神様だ

「すまないな…じゃあな空牙」

空牙は優しい表情をし、それを軽く見た後静かに爪で再び中をひつかくと異空間は消え僕と琴吹だけになっていた

「え？白雪…！白雪は」

「彼女なら…そこにいるさ」

琴吹は僕の目線を追い静かにそれを見つめる…鹿の白い角が真珠に挟まれたネックレスが太陽で光っている

「……絶対手放さないからね」

優しくネックレスを抱く中、引き出しを開けて爪をしまっ…これが力を使う時のルールだ

「……目的達成だな」

「ありがとう明久君」

「いや…僕のおかげじゃない…あの力のおかげだ」

「うっん…私は明久君だと思ってるよ？」

「そうか…」

しばらくお互いもどかしいように朱を散らしていると琴吹はこつちに静かに歩いてきた後…顔を近づけた…

「本当にありがとう明久君」

チュツと柔らかい音が頬に響き…視界がゆらく…

琴吹は意地悪そうに笑っていた…何が起きた…んだ？

「うわ…！」

突如ブワと風が吹き琴吹のスカートが舞い上がった…

「……………あ」

「ほえ…？」

舞い上がった琴吹のスカートの中に思わず視線がいく僕と首を傾げる琴吹…目に映ったのはライトピンクの紐パ……………

パアアアンと頬に激しい痛みが走り意識が刈り取られた

「…最低…！明久君の変態！」

これはこれでまんざらでもない…とにかく僕は始業式始まりに幼なじみの下着を拝むことができたのだった

「痛たた…さて僕らも戻らないと」すぐに目覚めまだ赤くなっている琴吹に声をかけると慌てるように戻ってきた

「坂本君怒ってないかな？」

「罵倒はするだろうけどあいつは素直じゃないからな」

「明久君が言えるの？」

「ん？何か言った？」

「う…ううん！なんでもないよ！」踵を返しすぐに保健室から出て行く…サボってしまったからな…早く戻らないと

『よし！！平賀を打て！！』

『『覚悟おお！！』』『Fクラスの力見せてやるうっ！』

「なんだこれ」「明久よ！何処へ行っておった」

「ちよつとな…それより秀吉…何が起きたんだ？」秀吉は頷いてから二人を指差した…それを見て僕と琴吹は固まった

「はっ！やっ！」

「オリヤリヤリヤ！」

弓野と春菜がDクラスの生徒達を無双していたからだ…いやいやいくらなんでも凄すぎるぞ！？

「あ！明久君！待っててすぐに終わるから！」

「時間はかけないからね明久君！」

「あ…ああ」

何だ？二人から凄い気迫を感じるんだが…一体何があいつらをここまで動かしてるんだ？

坂本春菜 Fクラス

世界史 250

弓野由美 Fクラス

世界史 280

（（勝つたら…明久君に誉めてもらえる！））

「二人共凄いなあ…」

「ん？その言い方だと琴吹は勉強苦手か？」

「どちらかと言えば得意だけど…ただ試験召喚獣の操作が苦手かなあ」

「…へえ…てつきりお前は勉強が駄目だと思ったけどな」

「酷いよ明久君！そう言う明久君はどうなの？」

「社会的科目しか自信がない」

ズバリと言い放つと琴吹はへえと何故か哀れむような目で見つめてきた…

「『人に散々言っておきながらお前はそんなのしかできないのかよ。馬鹿だなあ』って言いたいような目で見るなああ！」

『勝者Fクラス！』

「い、いつの間に？あ…姫路が討ち取ったのか…平賀に流石に同情しちまうよ」

この日、Fクラスの生徒から喜びとラブコールと悲鳴の声が絶えなかった

Dクラスに勝利し、僕らは明日に向けて下校していく…まだ明るいので残っている奴やラブコールを送る馬鹿がいた
そんな中…僕は美波から関節技を受けていたのだった

「でで！美波！何するんだ！これ以上やったら僕はゴム人間になってしまうんだぜ？」

「黙りなさい！あんた今まで何処へ行ってたのよ！」

「ぐ…おお。待て！多分お前は酷く誤解してるぞ！？」

ぐぐぐと締まる関節…まず言いたい…！冗談にならないほど痛いんだがああ！？」

「ガンデレが！痛いんだよ！」

「何よ！？吉井の癖に生意気よ！」

「『のび太の癖に生意気だ』と同じようなこと言ってるじゃねえ！

……ぐが…ドラえもんに謝れ！」

くそ！絶対こいつをモテないランキング一位にしてやるう！

ベキyun！ボキ！

「ぎゃあああああああ！」

美波は満足したかのように去っていく…くそ！いつもいつも…でもあいつも友達だから…手が出せない…いや…女子だからか
「痛てて…はあ…」

いつの間にか外された関節は元通りとなっている…こういう面では役に立つなこの力

「明久君」

「なっ！…うお」

立ち上がろうとした瞬間素早く誰かに押し倒された…いやこの胸からすれば雄二の妹…春菜しかない

「明久君！私の活躍見てくれた？」

「ああ…凄かったぞ」

「それほどでも」

「はいはい調子に乗るな」

春菜の頭を軽く叩きすぐにどける…理由は簡単だ…弓野が凄く誤解したような顔をしていたからだ

「あのな弓野！別に僕は春菜を犯そうとしてないからな？」

「本当？」

「やっぱりそう思ってたのかよ！？勿論本当だ！当たり前だろ！」

「そうなんだ……その…私で良ければ相手に…」

「ん？何赤くなってるんだよ？」

その言葉に春菜までも固まり飽きられた視線を送られる…しかも周
りから。『こいつ馬鹿だ』と言いたいように

「なんだよ？みんなどうしたんだ！？」

「やっぱり自覚ないか」

「明久君だからね」

「はああ？」

みんなから罵倒されそっぽを向いていると会話をしている姫路と琴
吹が目に入った

『ゆりちゃんは行かないんですか？』

『みずちゃん…私はいいよ…明久君はやっぱりモテるから』

『ゆりちゃん…近づいてみないとわからないことだって沢山ありま
すよ？』

『うん。でも…あの二人は明久君と凄く仲がいいし…私じゃ不釣り
合いだよ…』

『ゆりちゃん…』

「おい琴吹…」

「それじゃあ私部活あるから！」

「あ……………」

琴吹は姫路と話してからすぐに教室から出て行った…なんだよあれ

「姫路。あいつと何を話してたんだ？」

「乙女の内緒話です それより明久君。追わなくていいんですか？」

「何がだ…」

「話があるんですね？このままだと明日になるまで会えませんよ？」
「……………」

「あう…だいぶ練習してたから遅くなっちゃった…」

「ようやく終わったか」

「ごめんね…大会が近いから…って明久君！？…はわあ！」

琴吹は僕に驚いたのかフルートを思わず落としそうになり慌てていた。まあ無理もないさ…時刻は17時…外は夕焼け空で教室は僕しかいない

「みんなと帰ったんじゃないの？」

「ナンセンス…琴吹がいないのにそんなこと僕がする訳ないだろ？」

「え…！？」

「……久しぶりに会えたからちょっとお話ししようかと思ったしな」

「ああーそうなんだ」

あれ？何故か琴吹の表情が暗い気がするんだけど…何故？

「と、とりあえず帰ろう？」

「ああ…そうだな」

夕焼け空の下…僕らはちょっと買い物してから帰ることにした。しかし奢らされるのは慣れてるがまさか夕食の材料を買わされるとは…

「ねえ…明久君」

「何だ？」

琴吹は両手で僕と自分の鞆を持ちながら少しモジモジしている。とりあえず変なことを口走ったらこの買い物袋で叩こう

「私…可愛くなったかな？」

「……………」

黙り込んでしまう…答えはわかってるが口走っていいかわからないからだ…。ただ…本当に僕の幼なじみは変わってしまった

「……………琴吹。はっきり言わせてもらえばお前は魅力がなくなってる」

「え……………」

「……………昔のお前なら包み隠さず何でも言ってた。だけど今のお前を見ていると何故だが苦しいんだ」

「……………」

夕焼け空を眺めながらポツリポツリ呟く…琴吹は下を向いたままだ

「……………わからないんだもん」

「は…？」

「明久君…私を異性として見てくれるかわからない…明久君に可愛く見られたかったから髪だつて染めた。少しは遠慮がちなら明久君に可愛く見られると思ってた…でも…でも」

「……………琴吹？」

「ただ明久君に可愛くなつたつて言つてもらいたかつただけだよ！」

琴吹は捕らえるような赤い瞳でじつと見つめる…正直凄く顔が熱い

「…………胸だつて…大きくないけど」

「琴吹？お、おい」

「…………触つてみればわかるよ？」

いつもと違う琴吹に圧され掴まれた手が彼女の胸へと運ばれていく…

「…………ああ」

ムニヨンと制服からでも伝わってくる柔らかい感触…それは春菜とはまた違う…

「…………んうっ！」

「…………っ！」

その柔らかさに手のひらが反応しギュツと強めに握ると彼女から聞いたことのない甘い声が耳に響いた

「…………うわぁ！」

「ひゃぁん！」

我に返り鎖骨まで真っ赤になる…驚いた拍子に更に強く握つてしまひ琴吹はピクリと動いた。…………その声は頭にまで響きようやく足が後ろに下がった

「……………（琴吹の胸をも、揉んでしまった…）」

頭を横に振つてもあの瞬間を思い出してしまいそうだ…というより思い出してしまった

「……………」

「はっ！悪い琴吹！つい…」

「……………明久君のエッチ」

罵倒した彼女の顔は…昔のように固くなく朱を散らしながらにっこり笑っていた。その表情に思わず固まってしまう

「……………明久君もう一度聞いていいかな？」

「ああ…何だ？」

「私…可愛くなったかな？」

琴吹は夕焼け空を見ながらふと呟いた。わかってる…今のお前を見たら間違いなく言える

「ああ…外見さえ戻せば凄く可愛いよ……………」

「……………じゃあ私からも一ついいかな？」

「何だ？」

琴吹は前へタンツと飛び見上げるような…上目遣いのような姿勢で朱を散らしながらにつこり微笑む

「私ね……………大切な人がいるの…凄く優しくて凄く馬鹿で…凄く格好良くて大切な大切な幼なじみ」

「……………っ！」

彼女の言葉に頬が緩み朱を散らしながら彼女をまじまじと見つめた

彼女は優しく笑い…天使のような表情をしていた

第二章：みさワシ（前書き）

ある日、僕は究極のドジ娘と出会った…彼女のドジは驚のよう
に素早く飛ぶようだった

第二章：みさワシ

この物語を読んで… あっ… 明久弱くね？と思った人に告げる…

気のせいだ

確かに前の章でズタズタにされボコボコにされ拳げ句の果てに腹に穴を空けられたが結果的には勝利した。何故神と戦わないといけなかった僕が聞きたい

…何はともあれ僕は今生きている。それだけで十分じゃないか。だが別の意味で君達に伝えたい…

僕は弱いのだと

「何故買えないんだ！早く並んでいるのにい ！ゲームウウウ
！」

・驚と僕の休日とBクラス

「……………」

最悪だ… 人生はなんて卑劣な罠を仕掛けるんだ。一生懸命早起きして隣町まで行き朝早くから並んだのに新作のゲームは僕から逃げていく。諦めきれない僕は重い足を引きずりながら違う店へと向かうことにした

「でも、まあ 隣の街なのにこつも違うなんてな… なんだか別の県に來たみたいだ」

そんな僕の格好はジーンズにパーカーと言ったいたって普通の格好だ。そう言えばここから文月学園に來る奴らもいるんだよな… と思っ
ていると怪しい影が見える

「……何故だろう。凄く頭が痛い」

これは見ないフリがいいのかな？ だけどあんな目立つような場所で撮影しているのを見ると流石に… 同じ場所に住む奴としては止めておきたい

「何してるんだムツツリーニ？」

「……………（ブンブン）」

「顔を振らなくてもわかるから… 否定されてもその仕草からムツツリーニだつてわかるから」

「…………… そんな事実はない」

「事実つて…………。何してるんだ？」

「イメージトレーニング」

ムツツリーニはきっぱりと言うがイメージトレーニングでカメラを使う必要があるか？

「………… 明久はどうしてここに？」

「ん？ ああ、ゲームだよ… こちら辺しか発売しない限定者を」

「………… ちなみにジャンルは？」

「エロ… ギャルゲーさ」

「手に入れたら貸してほしい！」

やはりお前はムツツリーニだ。とりあえず僕は前に頼んだ写真をタダという条件で了解した。絶対手に入れないと駄目だ

「………… といてくださ い！」

「ん？ ごぶっ！」

「きゃう！」

背中に柔らかい感触と体が吹き飛びそうな感触が伝わり僕とぶつかってきた奴は盛大に吹き飛んだ。僕はなんとか着地したが隣ではバシャアアンと盛大に川へ落ち水が飛び散る

「大丈夫」

「痛たた…またやっちゃいました」

助け起こそうと近寄った時…鼻が熱くなる。彼女は川の水を浴び、さらに季節にちょうど良い薄手の物だった為…透けている。おかげで彼女の下着はくつきりとあらわになり、おまけにスカートまで捲れてショーツが見えている

「あ…ああ」

「あつ！ごめんなさい！あたしうつかりしてたもので」

「いや…僕こそ…その、色々とすまない」

「はにや？」

僕は彼女を川から引つ張り出しすぐに自分のパーカーを着せた

「あ、ありがとうございます」

「いや…いいさ」

「…でも、折角のパーカーを濡らす訳には行きませんよね」

彼女はそう言うパーカーを脱ぎ…服を脱ぎだし…「っておおおい！？」

「ちょっと待て！何サラリと脱ごうとしてんだ！」

「…でもパーカーが濡れちゃいますので…」

「いい！それ防水タイプだから！」

「大丈夫です。どんなことがあってもあなたに迷惑はかけませんので」

彼女はにつこり笑うと再び脱ぎだし始めた…「いやいやあんたの行為事態迷…！？」

「どうかしましたか？」

「あ…っいや…」

「くす…大丈夫ですよ。別に下着を見られたくらいで怒りませんから」

「いや…でも僕男だから…」

「…？ あたしから見えてあなたは大丈夫だと感じますが？」

（初対面の女の子から早速貴様はヘタレだ発言！？）

「あつ……スカートも濡れちゃってます」

「…（それだけは止めないとやばい！）」

少女は立ち上がりスカートに手をかけようとするが何故だが手が滑つたらしく…勢い余って倒れてきた

「きゃー！」

「ぐぶ！」

見事に下敷きになってしまい…顔にはダイレクトに布の感触とくくらしいの柔らかさが…

「あつ…！ごめんなさい！」

「う……なんだこれ？」

彼女はまさかドジッ娘か！？あのぶつかってきたこといい、川といい、これといい…。と、とにかくこの感触をいい加減離さないと

「よつと…「ふああん！？」ぬああ！？」

「あ、あの流石にそれはノノ」

少女はゆっくり息をしながら僕にそう言ってくる。無理もない…彼女のたわわは僕が掴んでいるのだから…なんてことだ！琴吹以外の娘の胸を揉んでしまうなんて…

「万死に値する！」

「きゃああ！何やってるんですか！」

少女をどけてナイフを首に持つてくる。ふっふっふ…あの力がない

今、僕は死ぬことができる！さらばだ明久よ！

「駄目です！　　きゃ！」

「ぬぐわあ！！」

再び彼女のスキルが発動し見事なまでに押し倒された。あ、凄くいい匂いが…

「……自殺なんて絶対駄目です！」

「わ、わかった。わかったからどいてくれ…じゃなきゃ理性が壊れそうだ」

「あ！すみません！」

彼女は素早くどいてパーカーを着る…。はあ…とりあえず彼女が急いでいた原因を聞く必要があるそうだ

例えば真っ直ぐな道があるとする…僕らは何もなく普通に歩く。普通だ…それが当たり前なのだが彼女は違う

彼女はどこかで必ず転ぶ…しかも男子達が憧れるようなことばかりを繰り出す天然ドジ娘…西山美沙は普通以下常識以上だ

彼女の趣味は音楽鑑賞や友達作りと言った実に女の子らしい趣味を持っている…だが

彼女は妖魔に取り憑かれ…当たり前のことすら失敗する

「で、…つまり西山は文月学園生徒。さらに二年Bクラスか…」

隣街は複雑だ…。とりあえず僕らは近くの喫茶店で話すことにした…。ああ、あのツイスターゲームのことを思い出してしまった…。元氣かなあいつ

「吉井さん？」

「悪い。続けてくれ」

あのイベントから戻ってきた後…頭が真っ白だった。思い出すたびすぐに真っ白になる。何があったんだっけな…、とにかく！今は話

しを

「それで…今は大丈夫なんですけど、一度交通事故にあいかけてしまったんです」

「…こ、交通事故って。どんだけやばいんだよ」

西山ははあとため息をつきながらゆっくり目を開く

「なんでそんなことになったんだ」

「実は…ちよつとスキップしながら歩いていたら石につまずいちゃって…それから起き上がった後風が吹いてでスカートを押さえるに必死で、早く立ち去ろうと思った矢先にボールが激突。ふらふらとなっていたら見事に車に衝突しかけたんです」

「ちよつとどころじゃないだろ！なんだその多様な事故は！どんだけドジなんだよ！」

これ想像以上に危ない…色んな意味でも危ないし彼女の何かが失われるくらい危ない気がする

ちよつとでスカートが風でつてなら…お前はそれよりもつとすごいドジをやったことがあるのかと思ってしまっくらいだ

と、言っても彼女自身僕が出会った女子達のようにグラマスだ。

つまりこのままだと本当に危険だ

「もつとあるんですよ…聞きたいですか？」

「もう沢山だ。あたかも自分の自慢話のように言うな…」

「すみません…」

「はあ…早く解決しないとな」

西山は僕の発言にピクリと反応し見上げるように尋ねてくる

「何か用事があるんですか？」

「ちよつとゲームをね…」

「ゲームですか…。なら私も付き添います！」

「え？悩みがあるだろ？」

「いえ…吉井君の為なら後でも」

西山は朱を散らしながら慌ててストローを唇に当てそしてジュースを飲む。西山の黒糸が綺麗に光ってるようで思わず目をそらす

「で、でも急いでるんでしょ？」

「大丈夫です！私のはいつで けほ！」

彼女はむせたらしく必死に咳をしている。何とか色っぽい

「すみません…むせちゃいました」

「い、いや気にするな。それより本当にいいの？」

「はい ようやく吉井君に会えて私も嬉…は、はは早く行きましよう！」

西山は慌てるように立ち上がり会計を済ませると僕の腕を掴んだままトタトタ走る。というかさっき何を言ってたんだ？

「ちよつ！あんまり急ぎすぎると」

「きゃ！」

「やっぱりかああ！」

ドタンと転び僕が押し倒した形になってしまった…。どんだけドジなんだよ…

「あ、ああの！」

「　！悪い！！」

僕も僕だ。いつの間にかラッキースケベになってないか？あ、でもさっきの感触は良かったなあ

「あ、あまり急がなくていいぜ？」

「は、はい…」

ふう…彼女がまた何かドジらないように見ておかないと寿命が縮みそうだ

「あの…吉井君」

「何だ？」

「どんなゲームを買うつもりですか？」

この時僕は…女の子に言えないゲームと言ってしまったことを深く後悔した

002 (前書き)

「初めて彼女の肌に触れたのは 小学校の時だった。」

鷲は鷹より強く、鳥類ではトップと言える…しかし、そらは空でのことだ

例えば地上で鷲がいるとしよう。鷲は飛ぶことができないとすれば地上では弱い生物に等しい。鶏がいい例だ…地上では早く、強く、気高い孤高の生き物が支配する

だが、この世界は空は狼、地上は鹿なのだ。地上や空でのルールなど存在しない

「きゃあ！」

「つと危ない…」

ゲームショップに向かっている最中 彼女は何回こけただろう 数えたくないないと思ってしまう さて、今の状況だが僕らはゲームショップにたどり着いた が、彼女が入り口で再び転び慣れた手付きで支える

「あ、ありがとうございます」

「全く…。さて、僕は買い物するから西山は待っていてくれ」

「え！？嫌です！」

見事に拒否される 女子に見せれる物じゃないんだいんだが、仕方ない素直に言おう

「いいか西山。僕は今からエロ『明久君！？』」

瞬間 愛らしい声が聞こえた この声はあいつしかいらない。いや！あいで確定だ

「おーい！明久 君！」

彼女：幼なじみの琴吹は遠くから手を振っている

問題ない！足はもう踏み出している！

「あきひ……！」

ボフンと柔らかい音が響く 僕は彼女の胸に飛びついたからだが、彼女はおっとりしている性格からボケーンとしている

「……もう。転んだら危ないよ？」

「笑って言える状況ですか!？」

西山はすかさずツツコミを入れる 確かに普通の人はそう思うが

彼女は気にすることはない

「だって明……明ちゃん結構おっちょこちよいだから」

「違うぞ琴吹！お前はボケをかます場所がなんか違う！そして明ちゃんはやめろ」

明ちゃん……昔彼女が僕を呼んでいた時の名称だ 僕としてはあ

まり好きではない

「じゃあ……アキちゃん？」

「ダウト！その呼び方だけはやめろ！耳が千切れそうだ！」

「むう……だって、折角だからその、特別な名前がいいし……」

「だからといって明ちゃんはないなあ……せめて明様とか？」

笑って答えるとジト目で見られた……うぐ！流石にこれは痛い！ガチで痛い！

「じゃあ……」

「さてさて！まだあるのか！？普通に明久でいいだろ？」

「明久君が明様って言うからだよ？」

「すみません。すみませんでした本当に！せめてアキ君とかでお願いします！」

琴吹は満足げに微笑み頭を撫でてきた。く…この恨み絶対忘れない！

「あの…それより胸に顔が…」

こんな状況でも西山はツツコミを忘れなかった

「…はあ…」

軽くため息をしながらゲームを探す 新作はこのエリアだ

「明久くんは何のジャンルを探してるの？」

「……………」

無視をしながら一つ一つ見ていく。結構他の作品と似ている系列がある為こまめに見ていかなきゃならない

「ね！明久くん！」

「……………いつの間にか明久に呼び方が戻ってるぞ」

軽くあしらい気になったゲームも籠にいれる　　ふむ…このアク

シヨンゲームは一人でも楽しめそうだ

「明久くん！聞いてよ」

「何？友達？はて…いたかな？」

「そんなこと誰も言っていないよ。あ、これとか面白そうだよ」

琴吹は頭が回る。だからすぐに切り替え僕に合わせてくれる

嬉しい　　が

「待て琴吹！なんだこのゲーム！？」

タイトルは『君を呼ぶ俺』とふざけたタイトルでジャンルは恋愛

「明久君もつと恋愛を勉強した方がいいよ？」

「いや…だからと言ってこれはないだろ？」

「そうかなあ？じゃあ明久くんは何を買おうとしてるの？」

（その言葉を待っていた！）

行動早く素早く琴吹の顎を掴み人が少ない場所へ行く

「……例えばこんなジャンルとかだな」

「え？…あ、明久くん？」

流石の琴吹も同様しているのか顔が赤くなっている　　ゆっくり赤いスカートを掴みギリギリまで持ち上げる

「……！！あ、あああ…き久くん！だ、ただ駄目だよお！」

「駄目？僕はジャンルを教えてやろうとしてるだけだが」

「だ、だからって…明久くん彼女いるでしょ？」

「彼女？…誰だ」

琴吹は手をはらい真つ赤な顔でパクパクと口を開く。薄い紅が異性の心をくすぐるかのようだ

「…に、Bクラスの西山さんとか」

「ん？知ってるのか？」

「うん…ドジをするけど成績は優秀だしおまけに美人さんだから」
「へえー。確かに美人ではあったけどあいつが優秀か（…）想像つかないよ」

僕が美人と言ったあたりで琴吹が微妙に落ち込んでいた…何故だろう？

「と、とにかく…明久くんは付き合ってるんだよね？」

「いや…全然」

「ほえ？」

「………………。ほっ」

ピラッとスカートを跳ね上げると琴吹は首を傾げていた。うむ…やつぱり琴吹はこのぐらいじゃ反応しないか

「明久くん？」

「少なくとも…西山と琴吹…付き合つとしたら琴吹だけどな僕は」

「……………へ！？」

ボンツと爆発したように彼女の顔は真っ赤になり髪まで跳ね上がった　そこまで驚くことだろうか？　ちよつとま

てよ、馬鹿なのは僕じゃねえか！

「……………」

「？ど、どうしたの？」

「あ、いや！別に」

色々考えていたら、視線が彼女に胸に刺さった　大きく
なった…あの時よりなどくだらないことを考えてしまい咄嗟に頭を振りすぐに買い物を再開した

あれは小学校の時だ

僕と琴吹は幼なじみ関係で、ちよくちよく家に遊びに行っていた

いや、毎日だ当初、僕は彼女が好きだった…つまり初恋相手と言っ訳だ

まだ馬鹿な僕だ。色々誤解を招いたりしていた

そんな中、上級生になり思春期まっさかりな時期…僕は興味本位で琴吹の体に触った

初めてではない。昔はお互いに背中

を流しあっていたからだ。けどその時はそんな幼い気持ちではなく胸の膨らみ…大人びてきた彼女に釘付けになっていた

琴吹

は嫌がりはしなかったが少し動揺していたのを覚えている
それ以降僕はスカートに手はつけても女子に手荒なことはしない

どんなことがあってもだ

「またせたな西山」

「いえ、気にしないでください」

ゲームショップから出た後、ベンチに座っていた西山の元へ歩く

「目的は達成したし、次はあんたの番だな」

「はい。よろしく願います」

「え？何処かいくの？」

「ん？ちよつとな。琴吹も来るか？」

「うーん…何するの明久くん？」

ニヤリと笑ってから太陽を眺める…琴吹と会えたのは良かったかもしれない

「
鷺を捕まえにいくのさ」

003（前書き）

「その晩僕は…」

言葉からわかる通り凄く甘いです！バカ恋よりやばいです
かなり危ないので読む時はご注意ください

二年Bクラス：西山 美沙は一人だった…。いくら優秀でもいくら美人でも誰も助けられなかったのだ。それもそのはず。彼女はあの…根本の彼女だったからだ。だが彼女は好きで付き合っているわけじゃない

そして…そんな彼女の弱みにつけ込み驚の妖魔が取り憑いたのだ。ドジをする…つまり優秀としてみれなくなりドジをし根本にふられ仲間を作りたいと言う彼女の気持ちに妖魔に取り憑かれ実現してしまった

しかし現実は何も変わらなかった

「…吉井君。何処へ向かってるのですか？」

「……学校さ。琴吹はわかるよな？」

「うんバッチリだよ」

軽く笑いながら撫でるとえへへと朱を散らしながら琴吹は満足げに微笑んだ うむ…ムツッリー二に撮ってもらいたいな

「西山：僕は今から君に取り憑いた妖魔を除去する為に学園に向かっているんだ。」

「……そうなんですか」

「嫌か？」

「違います…ただ不安なんです」

西山の言葉に足を止めて振り向く。西山はうつむきながらポツポツ

と喋ってくれた

西山はもし妖魔がいなくなったとしても根本と別れることができるか…友達を作れるか心配らしい

「ま、きっかけ次第だな」

「きっかけですか…」

靴の音が木霊しながら静かに響く。西山はつつむきながら左隣をトトと歩き、琴吹は右隣で腕を掴みながら歩いている

「あ、琴吹？歩きづらいんだが」

「…駄目？」

「あ、いや…駄目ってわけじゃ」

そんなうるうるした目で見るな！胸の感触が手伝って簡単に理性が壊れそうだ！

「吉井君って…結構おちゃめですね」

「西山…それは僕に対する嫌みか？」

「違いますよ…ただ吉井君って可愛いかなと」

「畜生！なんで僕が会おう奴らはこんなことばかり言っただあああー！」

しかしこれは後の悲劇にしか過ぎなかった

「きゃあ！」

「いふ！」

「ぎゃー！」

西山が踏み外し思い切り転倒する…その時僕も巻き込まれ…隣にいた琴吹も巻き込まれてしまった

「痛っ！」

「だ！」

「きゃあ！」

起き上がって少し歩くと西山が電柱にぶつかり後ろへ倒れる瞬時、

僕の後頭部に拳が直撃…見事に琴吹を押し倒すように倒れてしまった

「あう！」

「あぶねえ琴吹！」

「へ？ひゃあ！」

西山はだいぶ歩いていたらつまずいて転んだ。僕は自転車に跳ねられそうになり慌ててどくと琴吹の胸をわしづかみしてしまい琴吹は真っ赤になりながらピコハンを取り出し

パコン！と響き西山と僕に大きなこぶができたのだった

「ひゃ！」

「またか！」

「はわっ！」

次は西山が道を出た瞬間車が通り西山は後ろへこけて、車の音にびびった猫が逃げ去り、尻尾が当たり僕の頭に植木鉢落下 琴吹をまたまた押し倒してしまった

「あ、明久くん…」

「わざとじゃない！」

「………そこまでされると…わざとのような」

「いやだから「きゃあ！」だはっ！」

西山が再び後ろへこけて再び植木鉢落下…くそ…頭が割れそう

「…（フルフル）」

琴吹は赤くなりながら僕に掴まれた胸を見ていた。琴吹の胸は掴みやすく柔らかい…

「…あ、明久くん…」

「……………」

ムギユツと力を入れるとピクンと琴吹が跳ね上がった…。琴吹は真っ赤になりながら目を白黒させていた

「ふあ！…強くしたら…ら…め」

力を更に入れると琴吹は甘い声を出しながら目をトロンとさせていた。琴吹から甘く優しく花のような香りがして…つい性心がくすぐられてしまう

「あ…あ、明久くん…んあ！…ど…どうしたの？…ひあん」

「わからない…ただ何故か琴吹の体が気になって…気づいたら…

もつと甘い声が聞きたい」

胸を揉んでいた腕の力を緩め…片手の人差し指でつつと彼女の体をなぞる

「んああつ！…あ、あきひさ…くん…ん…ん…あ…ん…」

「……………」

彼女の声が更にくすぶる…つつと腰をなぞり…露骨に沿ってゆつくり彼女の下半身へ…………

「！？何やってんだよ僕！」

「はあ…はあ…」

慌てて荒い息をする琴吹から離れると琴吹がゆっくり体を起こす…向こうでは西山がずっと同じドジを繰り返していた

「 明久…くん? 」

「 …えと。これは… 」 言い訳など思いつかない…彼女の胸あたりに目が行き素早く逸らす

「 今日はやめよう。西山のあれはおそらく妖魔の力の副作用だ 」
「 それって… 」

「 あいつのドジを見てわかったんだ… 」

あいつは寄生タイプじゃなかったたてことさ… 」

西山を送った後、僕らはマンションへ帰った。西山には家で安静に…。明日迎えにいくと告げると西山は笑顔で頷いた

「 …面倒な妖魔に取り憑かれたな西山も 」

ため息をつきながら鍵を開けていると琴吹が俯きながら立っていた

「 琴吹? お前は隣だろ? 」

「 わかってるよ…わかってるけど… 」

「　　はあ…仕方ない僕も悪いんだし…上がっていけよ」
「え…？でも　　」

有無言わせる前に腕を掴み僕の家へと入れゆつくりドアを閉めた
カチャカチャ鍵とチェーンを閉めていると琴吹が後ろから抱きついてきた

「明久くん…抱いて」

「…無理に決まって…んぐ」

琴吹が言わせまいと口づけをする…甘い…柔らかい

「　　んっ」

優しくかったキスは次第に濃厚なものへと変わっていく…舌でかき乱し…絡み合い…クチュクチュと水音が響く

「　　ふぁ…」

甘い声が玄関で響き…更に刺激すると琴吹は力が抜けるように沈んでいく

「ふはっ…ここじゃ駄目だよな」

「うん…」

弱々しく頷いた琴吹を抱き上げリビングへと向かう…

わからない…わからないけど何故か…琴吹を抱きたかった

ドサツと優しくソファーに寝かせ上からついばむように口づける…
琴吹きは目を潤ませながら見上げてくる

「…………明久くん…私」

「ああ…」

彼女のカーディガンを掴みゆつくりと脱がしていく…キャミソール

…スカートを剥ぎ取っていくと彼女の薄い水色の下着姿が露わになる

「……いいのか？」

琴吹はコクンと頷き…言うが早く彼女の胸を揉むように握る

「あ…！…やつ、ひゃ！」

ゴクリと唾を飲み込み揉んでいくとひきしりに喘ぎ声が聞こえる。
彼女の本来の白い髪が揺れ…赤い瞳がトロンとなる。つい苛めなくなる

「…ぞくつとするよ琴吹。下着越しからでも柔らかいんだな」

「ん…ああ…い、わない…はん！…でんあ…」

首にリップ音を立てながら膝に座らせ柔らかい胸をむにむにと揉む

「はあん…あ…きひさく…ん…っ…んああ！ぶ…ブラを」

「……流石に直はできない」

「…んああっ！…お、お願い…ああっ」

つつと指で露わになった彼女の肌をなぞっていく…さっきよりも
高い声が響く

「…感じてるのか？」

「違…んああ！は…ああ！」

琴吹のショーツをなぞりゆっくり付け根まで這わせる…自分でも何がしたいかわからない

「性苛…お互いの性欲がくすぶらた時、狼と鹿の起こす行動…」

契約者もしかり
▯

その晩…僕は琴吹の大人びた体を触った…ただ弄っただけでこれと言ったことはしなかった

でも…琴吹のことが余計に頭から離れなくなってしまった

003（後書き）

いかがでしたでしょうか？こんな感じでやっていきたいと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8448z/>

バカと妖魔と召喚獣～狼少年と白き鹿～

2012年1月5日21時47分発行